

宇治拾遺物語抄

上卷

三五五

2115

よあきくらしき宇治抄巻おぼしめし
てはるるまこと中ころめちのまよひの終
もれしちりてはるるるるるるるるる
まよひのちり

明治廿八年十月

文学博士 黒川真頼

男 真道書

原序

世に宇治大納言物語といふ物あり。此の大納言は隆國といふ人なり。西宮殿高明の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年たかうなりては、あつさをわひて、いとまを申して、五月より八月までは、平等院一切經藏の南の山ぎはに、南泉房といふ所にこもりおられけり。さて宇治大納言とはきこえけり。もとどりをゆひわけて、をかへげなる姿にて、むろを板にきて、すぐみお侍りて、大きなるうちはをもて、あふがせなどして、往來の者、たかきいやくきをいはず、呼び集め、むかへ物語をせさせて、我れは、うちをひふして、語るにいたがひて、大きなる双紙にかゝれけり。天然の事もあり。大唐の事もあり。日本の事もあり。うれがうちに、たふとき事もあり。あはれなる事もあり。きたなき事もあり。少々は、うら物語もあ

り。利口なる事もあり。さまざま様々なり。世の人、これを興じ見る。十五帖なり。其の正本は、傳はりて、侍從俊貞といひし人のもとにぞありける。いかになりにけるにか。後にさかき人々、書き入れたるあひだ、物語多くなれり。大納言よりのちの事、書き入れたる本もあるにころ。さるほどに、今の世に、また物がたり書き入れたる出で來れり。大納言の物語に、もれたるを拾ひ集め、また、うの後の事など、書き集めたるなるべし。名を宇治拾遺の物語といふ。宇治にのこれるを拾ふと、つけたるにや。又、侍從を拾遺といへば、宇治拾遺物語といへるにや。差別知りがたし。たほつかなく。

緒言

一世に行はるゝ國文の教科書多けれども、大かた、江戸時代のものならずば、平安時代のものゝみにて、その間のもの、いと希なり。よりて、その欠を補はんとて、此の書をば、抄出つるなり。

一此の書の世に流布せる板本は、誤字少からねば、今は、兼て黒川眞頼博士が、諸種の古寫本活字本とも、校合したるものにつきて訂正しつ。

一原本は十五卷ありて、物語の數も、百九十六條あれども、教科用書の中に收めんも、いかゞはしきもの少からねば、今は、その中より、五十條を抄出して、上下二卷となしつ。

一此の書の作者は、古より、宇治大納言源隆國卿なりと、云ひ傳へたれど、隆國卿は、白河天皇の承暦元年に、七十四歳にて薨せし

人なるに、本書中には、それより後の事も交れよば、此の人の作とは、見とめがたし。さるによりて、世には、本書は隆國卿の作にて、それより後の事は、後人の書き添へたるものならん、この説もあれど、此の書の全部を見渡すに、始終同じ筆つきなれば、此の説も、また承け難し。然れば、何人の作ならんか。其の作者こそ知られねど、十の卷の第三段なる「堀河院、明暹に、笛吹かせ給ふ事」の條の終りの注に、「件、笛、幸清進上、當今、建保三年也」とありて、幸清は、石清水八幡宮の別當にて、當今とは、順徳天皇をさし奉りし事なれば、此の書の成りしも、やがて、うの比ならんか（即ち順徳天皇の建保の比にて、隆國卿の薨せしより、凡そ百三十餘年の後の事なるべし）。

明治二十八年十月

東宮 鐵眞呂 誌す

宇治拾遺物語抄 上卷

目次

- (一) 鬼に、瘤とらるゝ事 一丁
- (二) 龍門の聖鹿に替らんとする事 七丁
- (三) 兒の、かい餅するに、空寝したる事 九丁
- (四) 田舎の兒、櫻のちるを見て泣く事 十丁
- (五) 尼、地藏を見たてまつる事 十一丁
- (六) 利仁、薯蕷粥の事 十三丁
- (七) 用經、あらまきの事 二十五丁
- (八) 厚行、死人を家より出す事 三十一丁
- (九) 鼻長き僧の事 三十四丁
- (十) 袴垂、保昌にあふ事 三十八丁

- (十一) なりむら、強力の學士にあふ事 四十丁
- (十二) 鳥羽僧正と、國俊と戯れの事 四十五丁
- (十三) 繪佛師良秀、家のやくるを見て悦ぶ事 四十九丁
- (十四) 虎の鰐をとりたる事 五十丁
- (十五) 樵夫の歌の事 五十三丁
- (十六) 藤六の事 五十三丁
- (十七) 雀、恩を報ずる事 五十四丁
- (十八) 小野篁、廣才の事 六十三丁
- (十九) 妹背島の事 六十四丁
- (二十) 白河院御寢の時、物に魔はれさせ給ふ事 六十七丁
- (廿一) 實子にあらざる人、實子の由をたる事 六十八丁
- (廿二) 或僧、人の許にて、氷魚ぬすみくひたる事 七十四丁

- (廿三) 帽子叟、孔子と問答の事 七十五丁
 - (廿四) 五色の鹿の事 七十七丁
 - (廿五) 檢非違、使忠明の事 八十二丁
 - (廿六) 小野宮大饗の事 八十三丁
- 附西宮殿、富小路大臣等、大饗の事

宇治拾遺物語抄 上卷

東宮鐵眞呂抄

(一) 鬼に瘤とらるゝ事

これも今はむかひ、右のかほに、大なるこぶある翁ありけり。大高山へ行きぬ。雨風はいたなくて、歸るにおよぼで、山の中に、心にもあらずとまりぬ。又、木こりもなかりけり。恐ろしさ、すべきかたなく。木のうつほのありけるに、はひ入りて、目もあはず、かゝまりておたるほどに、遙かより、人の音、多くして、とゞめきくるおとす。いかにも山の中に、たゞひとりおたるに、人のけはひのけければ、すこゝ息出づる心ちして、見いだしければ、大かた、やうくさまぶなる物ども、赤き色には、青き物をき、黒き色には、赤き物をき、

たふさぎにかき、大かた、目一つあるものあり、口なき物など、大かた、いかにもいふべきにあらぬ物ども、百人ばかりひいめき集りて、火をてんの目の如くにともして、わがわたるうつほ木のまへに、おまはりぬ。大かた、いとゞ物おほえず。

むねとあると見ゆる鬼、よこ座にわたたり。うらうへに、二ならびに居なみたる鬼、かづを知らず。そのすがた、おのゝいひ盡しがたし。酒まわらせ遊ぶありさま、この世の人のする定なり。たひくかはらけ始まりて、むねとの鬼、この外にゑひたるさまなり。未より若き鬼一人立ちて、折敷をかざして、なにといふにか、くどきく、さることを言ひて、横座の鬼の前にねりいで、くどくめり。横座の鬼、盃を左の手にもちて、笑みこだれたるさま、たゞ、この世の人のごとく舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。あゝくまふもあ

り、よく舞ふもあり。あさましくと見るほどに、この横座にわたる鬼のいふやう、こよひの御あそびこそ、いつにもすぐれたれ。たゞ、さも珍らうからんかなでを見ばや、などいふに、此の翁ものよつきたりけるにや。また神佛の思はせ給ひけるにや。あはれ、はゞり出で、舞はばやと思ふを、一度は思ひかへつ。うれに、なにとなく、鬼どもが、うちあげたる拍子の、よげに聞えければ、さもあれ、たゞ、はゞり出で、舞ひてん。死なば、さてありなんと思ひとりて、木のうつほより、烏帽子は鼻に垂れかけたる翁の、腰によきといふ木きるものさして、よこ座の鬼のわたる前に、をどり出でたり。此の鬼ども、をどりあがりて、こはなにぞとさわぎあへり。おきな、のひあがりかゞまりて、舞ふべきかさり、すぢりもちり、ゑいごゑを出して、一庭をはゞりまはり舞ふ。よこ座の鬼よりは、むめて、集

りぬたる鬼どもあさみ興ずよこ座の鬼のいはく多くの年ごろ此のあうびをいつれどもいまだかゝるものにこそあはざりつれ。今よりこの翁かやうの御遊びにかならず参れといふおきな申すやう、さたにおよび候はず参り候ふべし。このたびにはかにて、をさめの手も忘れ候ひにたりかやうに御覽にかなひ候はゞ、いづかに仕うまつり候はんといふよこ座の鬼いみじう申したり。必ずまねるべきなりといふ。

奥の座の三番目にぬたる鬼この翁はかくは申し候へどもまねらぬ事も候はんずらんとおほえ候ふに、おほしゝちをや取らるべく候ふらんといふよこ座の鬼、ちかるべし。いひて、何か取るべきとおのゝいひさたするに、よこ座の鬼のいふやう、かのおきながつらにある瘤をや取るべき。こぶは、ふくの物な

れば、うれをや惜しと思ふらんといふに、翁がいふやう、たゞ目はなをばめすとも、この瘤はゆるしたまはり候はん。と比もちて候ふものをゆゑなくめされ、すぢなき事に候ひなんといへば、横座の鬼かう惜み申す物なり。たゞうれを取るべしといへば、鬼、寄りて、さは取るぞとて、ねぢて引くに、大かたいたき事なく。さて、かならず、このたびの御あそびにまねるべしとて、曉に、鳥などなきぬれば、鬼どもかへりぬ。

翁、かほをさぐるに、年ごろありしこぶ、あとかたなく、かいのこひたるやうに、つやくなかりければ、木こらん事も忘れて、家にかへりぬ。妻のうば、こはいかなりつる事ぞと問へば、いかゞとかなる。あさましき事かなといふ。となりにある翁、左のかほに、大なる瘤ありけるが、このおきな、瘤のうせたるを見て、こはいかに

て、瘤は失せ給ひたるぞ。いづこなる醫師のとり申したるぞ。我れ
につたへ給へ。このこぶとらん」といひければ、これは、くすゝの取
りたるにもあらず、いかゞの事ありて、鬼のとりたるなり」とい
ひければ、われ、うの定にしてとらん」とて、事の次第を、こまかに問
ひければ、教へつ。この翁いふまゝにして、うの木のうちほに入り
て待ちければ、まことに、きくやうにして、鬼ども、いできたり。おま
はりて、酒のみあうびて、いづら翁は参りたるか」といひければ、こ
のおきな、おろろ」と思ひながら、ゆるぎ出でたれば、鬼ども、こゝ
に、おきな参りてさふらふ」と申せば、よこ座の鬼、こちまわれ。どく
舞へ」といへば、さきの翁よりは、天骨もなく、おろろ、かなでたり
ければ、よこ座のおに、このたびは、わろく舞ひたり。かへすくわ
ろ。その取りたり。質のこぶ、かへしたべ」といひければ、末つ方

より、鬼出で来て、おちのこぶかへしたぶぞ」とて、いまかたゝの
顔に、投げつけたりければ、うらうへに、瘤つきたるおきな、ころ
なりたりけれ。ものうらやみは、爲まよき事なりとか。

(二) 龍門の聖鹿に替らんとする事

大和國に、龍門といふ所に、聖ありけり。住みける所を名にて、龍門
のひじりとぞいひける。うのひじりの、親しく知りたりける男の、
あけくれ、おゝを殺しけるに、ともいふ事を、おける比、いみじ
う暗かりける夜、照射に出でにけり。鹿をもとめありくほどに、目
を、あはせたりければ、いゝありけり。とて、おゝまはし、くする
に、たゝかに目を合せたり。矢比にまはしよりて、火串に引きかけ
て、矢をはげて、射んとて、弓ふりたて見るに、この鹿の目のあひの、
れいの鹿の目のあはひよりも近くて、目の色もかはりたりけれ

ば、あやーと思ひて、弓を引きさして、よく見けるに、なほあやーか
りければ、矢をはづして、火をとりて見るに、鹿の目にはあらぬな
りけり」と見て、起きばおきよ」と思ひて、近くまはしよせて見れば、
身は一ぢやうの皮にてあり。なほ鹿なりとて、又射んとするに、な
ほ、目の、あらざりければ、たゞうちうちよせて見るに、法師の頭
に見なすつ。

こはいかにと見て、おり走りて、火うちふきて、あしをり」とて、見れ
ば、この聖の、目うちたしきて、あしの皮を引きかつきて、うひふ
給へり。こはいかに、かくてはおはしますぞ」といへば、ほろくど
泣きて、わぬーが、制する事をきかず、いたく、この鹿をころす。われ
鹿にかはりて殺されなば、さりともし、すこしはとゞまりなん、と思
へば、かくて射られんとて、をるなり。口をう射ざりつ」と、のた

まふに、この男、ふしまろひ泣きて、かくまで、おほしける事を、あな
がちに、お侍りける事」とて、そこにて、刀をぬきて、弓うちきり、やな
ぐひみな折りくだきて、聖のおはしけるがかぎり、ひじりにつか
はれて、ひじり失せたまひければ、かはりて、又、うこにぞおこなひ
ておたりけるとなん。

(三) 兒の、かい餅するに、空寝したる事

これも、今はむかひ、比叡の山に、ちごありけり。僧たち、よおのつれ
づに、いざ、かいまちひせん」といひけるを、このちご、心よせに聞
きけり。さりとて、おいださんを待ちて、寝ざらんも、わろかりなん
とおもひて、かた方によりて、ねたるよしにて、出でくるを待ちけ
るに、すでに、お出したるさまにて、ひしめきあひたり。このちご、さ
だめて、おどろかささんずらん」と、待ちおたるに、僧の、もの申しさぶ

らはん。おどろかせ給へ」といふを、うれしとは思へども、たゞ一どに、いらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一こ急よばれていらへん、と念じて、ねたるほどに、や、なおこしたてまつりそをさなき人は、寝入り給ひにけり」といふ聲のしければ、あな、わひしと思ひて、いま一ど、おこせかし」と、おもひねに聞けば、ひしくと、たゞ食ひに食ふおどのしければ、すべなくて無期ムキのちに、えいと、いらへたりければ、僧たち、わらふことかぎりなし。

(四) 田舎のちで、櫻のちるを見て泣く事

これも、今はむかし、田舎のちでの、ひえの山へのほりたりけるが、櫻のめでたく咲きたりけるに、風の烈しく吹きけるを見て、このちで、さめくと泣きけるを見て、僧の、やはら寄りて、など、かうは泣かせ給ふぞ。この花の散るを、惜しうおほえさせ給ふか。櫻は、は

かなきものにて、かく、ほどなくうつろひ候ふなり。されども、然のみぞさふらふ。となくさめければ、櫻の散らんは、あながちにいかせん。くるしからず。我がてくの作りたる麥の、花ちりて、實のいらざらん思ふが、わひしきといひて、さくりあげて、よとなきければ、うたてしやな。

(五) 尼、地藏を見たてまつる事

今はむかし、丹後國に、老尼ありけり。地藏菩薩は、あかつきごとにありき給ふことを、ほのかに聞きて、曉ごとに、地藏見たてまつらんとて、ひと夜、かいまどひありくに、博うちちの、うちほうけて、おたるが見て、尼公は、寒きに、何わさし給ふぞ」といへば、地藏菩薩の、あかつきにありき給ふなるに、逢ひまねらせんとて、かくありくなり」といへば、ちさうのありかせ給ふみちは、我れこそ知りたれば、

いざたまへ。あはせまわらせん」といへば、あはれ、うれしき事かな。地藏のありかせ給はん所へ、我れをわておはせよ」といへば、われに、物をえさせ給へ。やがてわて奉らん」といひければ、此のきたるきぬたてまつらん」といへば、いざたまへ」とて、となりなる所へわてゆく。

尼、よろこびて、いろざ行くに、その子に、ちさうといふ童ありけるを、うれが親を知りたりけるによりて、ちさうは」と問ひければ、おや、遊びにいぬ。いま來なん」といへば、くは、こゝなり。地藏のおはします所は」といへば、尼、嬉しくて、つむぎのきぬをぬきて取らずれば、ぼくうちは、急ぎて取りていぬ。尼は、地藏見まわらせん」とて、わたれば、親どもは、心えず、など、此のわらはを見んと思ふらんと、思ふほどに、十ばかりなる童のきたるを、くは、ちさう」といへば、尼、

見るまゝに、せひも知らず、ふくまろびて、拜みいりて、つちにうつぶしたり。童、ずはえをもちて、遊びけるまゝに、來たりけるが、うのずはえして、手ずさひのやうに、額をかけば、額より顔のうへまで、さけぬ。さけたる中より、えもいはず、めでたき地藏の御かほ見えたまふ。あま、拜み入りて、うち見あげたれば、かくて、立ちたまへれば、涙を流して、をがみ入りまわらせて、やがて極樂へまわりけり。されば、心にだにも、深く念むつれば、佛も見えたまふなりけり、と、信ずべし。

(六) 利仁、薯蕷粥の事

今はむかし、利仁の將軍のわかよりける時、その時の一の人の御もどに、恪勤して候ひけるに、正月に大饗せられけるに、そのかみは、大饗はてし、とりはみといふものを、はらひて入れずして、大饗

のれろゝ米とて、給仕ゝたる恪勤のものどもの食ひけるなり。その所に、どゝ比になりて給仕ゝたる者の中には、所えたる五位ありけり。そのおろゝ米の座にて、いも粥すゝりて、舌うちをゝて、あはれ、いかで、いも粥にあかん」といひければ、利仁、これを聞きて、大夫殿、いまだいもがゆに飽かせ給はずや」と問ふ。五位、いまだ飽き侍らず」といへば、あかせたてまつりてんか」といへば、かゝこく侍らん」とてやみぬ。

さて四五日ばかりありて、曹司ずみにてありける所へ、利仁きていふやう、いざ、させ給へ。湯あみに。大夫殿といへば、いとかゝこき事かな。こよひ身のかゆく侍りつるに、乗り物こそは侍らね」といへば、こゝに、あやゝの馬ぐゝて侍り」といへば、あな、うれゝ、く」といひて、薄綿のきぬ二つばかりに、青にひのさゝぬきの、すそやれ

たるに、同じ色の狩衣の、かたすこゝおちたるに、またの袴もきず、鼻高なるものゝ、さきは赤みて、穴のあたり、ぬればみたるは、すゝばなをのこはぬなめりと見ゆ。狩衣のうゝろは、帯にひきゆがめられたるまゝに、ひきもつくろはねば、いみじう見ぐるゝ。をかゝけれども、さきにたてゝ、われも人も、馬にのりて、河原さまにうち出でぬ。

五位のどもには、あやゝの童だになゝ。利仁がどもには、調度かけ、舍人雑色ひとりぞありける。河原うち過ぎて、粟田口にかゝるに、「いづくへぞ」と問へば、たゞ「こゝぞ、く」とて、山科もすぎぬ。こはいかに、こゝぞく」とて、山ゝなも過ゝつるは「といへば、あゝこゝ」とて、關山も過ぎぬ。こゝぞ、く」とて、三井寺に、知りたる僧のもとにいきたれば、こゝに、湯わかすかと思ふだにも、物ぐるほゝう遠

かりけりと思ふに、こゝにも湯ありげもな。いづら湯はといへば、まことは、敦賀へおてたてまつるなりといへば、物ぐるほりけるを、京にて、さとのたまはましかば、下人なども、具すべかりけるを、といへば、利仁あざわらひて、と、仁ひとり侍らば、千人とれほせといふ。かくて、物など食ひて、いそぎ出でぬ。そこにて、利仁、やなぐひとりて、負ひける。

かくて行くほどに、みつの濱に、狐の、一つ走り出でたるを見て、よき使出で來たりとて、利仁、狐をれしかくれば、狐身をなげて逃ぐれども、追ひせめられて、え逃げず、れちかよりて、狐のゑり足を取りて、ひきあげつ。乗りたる馬、いとかいことも見えざりつれども、いみじき逸物にてありければ、いくばくものほさずして、どらへたる所に、この五位、走らせていきつきたれば、狐をひきあげて

いふやふは、と狐、こよひのうち、利仁が家の、つるがにまかりて言はんやうは、『にはかに、客人をぐり奉りて、くだるなり。明日の巳の時に、高島邊に、をのこども、迎へに、馬に鞍れきて、二疋ぐりて、まうでこ』といへも、言はぬものならば、と狐、たゞ試みよ。狐は、變化あるものなれば、けふのうち、行きつきて言へとて、放てば、荒涼の使かなといふ。よ、御覽せよ。まからでは、よにあらむといふに、はやく、狐見返しくして、前に走りゆく。よくまかるめりといふに合せて、はより先だちて失せぬ。

かくて、その夜は、道にとまりて、つとめて、とく出で、行くほどに、誠に、巳の時ばかりに、卅騎ばかり、寄りてくるあり。何にかあらんと見るに、をのこども、まうで來たりといへば、不定の事かなといふほどに、たゞちかに近くなりて、ほらくと下るゝほどに、これ

見よ。まことには、れはしたるは」といへば、利仁うちほゝゑみて、何事ぞ」と問ふ。れとなしき郎等進み來て、「希有の事の候ひつるなり」といふ。まづ「馬はありや」といへば、「二疋さふらふ」といふ。食物などして來ければ、そのほどに、れりゐて食ふついでに、れとなしき郎等のいふやう「夜べ、けうの事のさふらひくなり。戌の時ばかりに、大はん所の胸をきりにきりて、やませ給ひしかば、いかなる事にかとて、にはかに「僧召さん」など、さわがせ給ひしほどに、てづから仰せ候ふやう「なにか、騒がせ給ふ。れのれは狐なり。別の事なく。この五日、みつの濱にて、殿の下らせ給ひつるに、逢ひたてまつりたりつるに、逃げつれど、え逃げで、どらへられ奉りたりつるに、けふのうち、わが家にいきつきて、「客人ぐい奉りてなんくだる。あす、巳の時に、馬二つに、鞍れきて、具して、をのことも、高島の津に、まわり

あへ」といへ。も、今日のうちに、いきつきて言はずば、辛きめ見せんずるぞ」と仰せられつるなり。をのことも、どくく、出で立ちてまわれ。れそく參らば、我れは、勘當かうぶりなん」と、れち騒がせ給ひつれば、をのことも、めい仰せさぶらひつれば、例さまにならせ給ひにき。その後、鳥と共に、參り候ひつるなり」といへば、利仁、うちゑみて、五位に見あはすれば、五位、あさましと思ひたり。

物など、くひはてし、急ぎ立ちて、くらゝゝに、行きつきぬ。これ見よ。まことなりけり」と、あさみあひたり。五位は、馬よりれりて、家のさまを見るよ、にぎはしきく、めでたき事物にも似ず。もと着たるきぬ二つがうへに、利仁が宿衣を着せられども、身の中、透きたるべければ、いみじう寒げに思ひたるに、長すびつに、火を多うれこしたり。たしみ厚らかに、きて、くだ物、くひ物、をまうけて、たのし

く覺ゆるに、道のほど寒くれば「つらん」とて、ぬり色のきぬの、綿厚らかなる、三つひき重ねてもてきて、うちれほひたるに、たのゝとは、れろかなり。

物くひなどして、事なづまりたるに、ちうどの有仁、出て来ていふやう、「こはいかで、かくはわたらせ給へるに、これに合せて、御使のさま、物ぐるほしうて、うへ、俄かに、やませ奉り給ふ。けうの事なり」といへば、利仁、うち笑ひて、「物の心見んと思ひて、ちたりつる事を、まことにならうで来て、つけて侍るにこそあんなれ」といへば、ちうども笑ひて、「希有の事なり」といふ。ぐい奉らせ給ひつらん人は、このれは「ます殿の御事か」といへば、「さに侍り。いもがゆに、いまだ飽かず、と仰せらるれば、あかせ奉らんとて、おてたてまつりたる」といへば、「やすき物にも、えあかせ給はざりけるかな」とて、たはぶ

るれば、五位、東山に、湯わかしたりとて、人をはかりいでよ、かくのたまふなり」など、いひたはぶれて、夜すこし、ふけぬれば、ちうども入りぬ。

ね所とおほしき所に、五位入りて、ねんとするに、綿四五寸ばかりある宿衣あり。我がもとの薄綿は、むつかしう、何のあるにか、かゆき所もいでくる衣なれば、ぬぎれきて、ぬり色のきぬ三つがうへに、このどのぬもの、ひき着ては、ふしたる、心いまだならはぬに、氣もあげつべし。あせ水にて、ふしたるに、またかたはらに、人のはたらけば、たそと問へば、「御あし、たまへ」と候へば、まわりつるなり」といふ。けはひにくからねば、かきふせて、風の透く所にふせたり。かゝるほどに、物たかくいふ聲す。何事ぞと聞けば、をのこのさけひていふやう、「このへんの下人、うけたまはれ。あすの卯の時に、切

り口三寸、長さ五尺のいも、おのく、一すぢつゝもてまねれど、いふなりけり。あさましう、れほのかにも、言ふものかなと、聞きて寝入りぬ。あかつき方に聞けば、庭に、庭をくれとのするを、何わざするにかあらん、と聞くに、こやたうはんよりはむめて、起きたちておたるほどに、部あげたるに、見れば、長むしろをぞ、四五枚きたる。なにの料にかあらん、と見るほどに、げす男の、木のやうなる物を、肩にうちかけて来て、一すぢれきていぬ。そのうち、うちつゞき、もて来つゝ、れくを見れば、まこと口三寸ばかりのいもの、五六尺ばかりなるを、一すぢつゝもて来て、れくとすれど、巳の時まで、れきければ、おたる屋と、ひとく置きなつ。夜へ、さけひは、早う、そのへんにある、下人のかざりに、物いひきかすとて、人よひの岡とてある、塚のうへにて、いふなりけり。たゞ、その聲のれよぶ限

りのめぐりの下人のかざり、もてくるに、だに、さばかり多かり。まして、立ちのきたる従者どもの、多さを、思ひやるべし。

あさましと見たるほどに、五石納なはの釜を、五つ六つ舁きもてきて、庭に、くひどもうちて、居ゑわたしたり。何の料ぞ、と見るほどに、おほきぬの、あを襖をといふ物きて、帯して、若やかに、きたなげなき女どもの、白く新しき桶に、水を入れて、此の釜釜どもに、さくくといふ。何ぞ、湯わかすか、と見れば、この水とみるは、みせん釜煎なりけり。若きものを、このどもの、袂より手出したる、薄らかなる刀の、長やかなる持たるが、十餘人ばかり出で来て、このいもをむきつゝ、すきざりにきれば、はやく、いも粥粥なるなりけり、と見るに、くふべき心ちもせず。かへりては、疎ましくなりけり。さらくとかへらかして、いもがゆいでまうできにたりといふ。まねらせよとて、先づ、大な

るかはらけ具して、かねのひさげ提の、一斗ばかり入りぬべきに、三つ四つに入れて、さとてもてきたるに、あきて、一もりをだに、え食はず、飽きたりといへば、いみじう笑ひて、集りておて、客人殿の御とくに、いもがゆ食ひつとといひあへり。

かやうにするほどに、向ひの長屋の軒に、狐の、さいのぞきておたるを、利仁見つけて、かれ御らんせよ。候ひ見狐の、げさん見するをとて、かれに物食はせよと、いひければ、食はするに、うちくひてけり。かくて、よろづの事、たのもいへば、れろかなり。一月ばかりありて、のほりけるに、けをさめの装束まども、あまたくだり、又、たの八丈綿絹など、皮ごどもに入れて取らせ、はじめの夜のどのおもの、はた更なり、馬に鞍れきながら、取らせてこそれくりけれ。きう者なれども、所につけて、年比になりて、ゆるされたるものは、さる

ものよ、おのづから、あるなりけり。

(七) 用經、あら卷の事

今はむかへ、左京のかみなりける、古上達部ありけり。年老いて、いみじう古めかへかりけり。下わたりなる家に、ありきもせて、こもりおたりけり。そのつかさのさくわんにて、紀の用經といふものありけり。長岡に、なん住みける。つかさの目なれば、このかみの許にも、來てなん音づりける。此の用經、大殿にまわりて、贄殿におたるほどに、淡路守より、ちか々、鯛のあらまきを、多く奉りたりけるを、にへ殿にも、てまわりたり。贄殿のあづかりよいずみに、二まき、用經こひとりて、まきにさくけて置くとて、よいずみにいふやう、「これ、人して、どりに奉らんをりに、おこせ給へ」と言ひれく。心の中に思ひけるやう、これ、わがつかさのかみに奉りて、音づり

奉らん」と思ひて、これをまきにさし上げて、左京のかみのもとにいきて、見れば、かんの君、いでぬに、まらうと二三人ばかり来て、あるむせんとて、地火爐に、火おこしなごして、わがもとにて、物くはんとするに、はかしく、き魚もなし。鯉鳥など、用ありげなり。それに、用經が申すやう、用經がもとにこそ、津の國なる下人の、鯛のあらまき三つ、もてまうで來たりつるを、一まき、たべ試み侍りつるが、えもいはず、めでたく候ひつれば、いま二まきは、けがさでれきて候ふ。急ぎて、まうでつるに、下人の候は、でもてまわり候はざりつるなり。たゞ今、どりにつかはさんはいかに」と、聲高く、したり顔に、袖をつくろひて、口わきかいのごひなどして、おあがりのぞきて申せば、かみ、さるべき物のなきに、いとよき事かな。とく取りにやれ」とのたまふ。まらうど共も、くふべき物のさふらはさめるに、九

月ばかりの比なれば、この比、鳥のあぢはひ、いとわろし。鯉はまだいでこず。よき鯛は、きいの物なり。など、いひあへり。

用經、馬ひかへたるわらはを、呼びとりて、馬をば、御門のわきにつなぎて、たゞ今、走り、大殿に、にへ殿の預りの主に、「その置きつるあらまき、たゞ今おこせ給へ」と、さしめきて、時かはさず、もてこほかによるな。とくはしれ」とて、やりつ。さて、狙あらひて、もてまわれ」と、聲たかくいひて、やがて、用經、けふの庖丁は仕らん、といひて、まなぼしけづり、鞘なる刀ぬいて、まうけつし、あな久し。いづら、きぬやなど、心もどながりぬたり。おそく、と、言ひわたるほどに、やりつる童、木の枝に、あらまき二つゆひつけて、もて來たり。

「いとかくこく、あはれ、飛ぶがごと、走りて、まうで來たる童かな。と、ほめて、とりて、まな板の上に、うちれきて、ことごとく、く、大鯉つく

らんやうに、左右の袖つくろひ、くよりひきゆひ、片膝たて、いま片
ひきをばふせて、いみじくつきふくくおなして、あらまきの繩
を、れいきりて、刀して、藁をれい開くに、ほろくくと、物ども、こぼれ
て落つるを見れば、平あいた、古志きれ、古わらうづ、ふるぐつ、かや
うの物のかざりあるに、用經あきれて、刀も、まな箸も、うちすてよ、
沓もはきあへず、逃げていぬ。左京のかみも、客人も、あきれて、目も
口もあきて居たり。まへなるさぶらひどもよ、あさましくて、目を
見かはして、居なみおたる顔ども、いとあやうげなり。物くひ、酒の
みつるあそびも、みな、すさまじくなりて、一人たち、二人たち、みな
立ちていぬ。

左京のかみのいはく、此のをのこせば、かく、えもいはぬ、おれもの
狂ひとは、知りたりつれども、つかさのかみとて、來むつびつれば、

よいととは思はねど、追ふべき事もあらねば、さど見てあるに、かゝ
るわざをして、はからんをば、いかすべきものありき人は、はか
なき事につけても、かゝるなり。いかに、世の人、聞き傳へて、世の笑
ひぐさにせんとすらんと、そらを仰ぎて、なげき給ふ事、かざりな
し。

用經は、馬にのりて、はせちらして、殿にまわりて、にへ殿の預り、よ
いずみに逢ひて、此のあらまきをば、惜いとおほさば、おいらかに、
取り給ひてはあらで、かゝる事、おいで給へると、泣きぬばかりに
恨みのよゝる事、かざりなし。よゝずみがいはいはく、此は、いかにのた
まふことぞ。あらまきは、奉りて後、あからさまに、宿にまかりつと
て、おのがをのこにいふやう、『左京のかみのぬいの許から、あらま
きどりにおこせたらば、取りて、それに取らせよ』と、いひおきて、ま

かて、たゞ今、かへり参りて見るに、あらまきなければ、『いづち、いぬるぞ』と問ふに、『ちかゞの御使ありつれば、のたまはせつるやうに、取りてたてまつりつる』と、いひつれば、『さなこそは、あんなれ』と、きよてなん侍る。事のやうを知らずといへば、『さらば、かひなくとも、いひ預けつらんぬ』を呼びて、問ひ給へ』と、いへば、男をよびて、問はんとするに、出でよいにけり。

膳部なる男がいふやう、おのれが部屋に入りおて聞きつれば、この若ぬゝたちの、『まさになげられたる荒巻こそあれ。こは、たが置きたるぞ。何の料ぞ』と問ひつれば、誰れにか、ありつらん、『左京のさくわんのぬゝのなり』といひつれば、『さては、事にもあらず、すべきやうあり』とて、取りおろして、鯛をば、みな、きりまわりて、かはりに、古志きれ、平あゝだ、などをこを入れて、まさにおかると、聞き侍

りつれ^{行敷}と語れば、用經きよて、叱りのよゝる事、かぎりなし。この聲を聞きて、人々、いとほしとは言はで、笑ひのよゝる。用經をわびて、『かく笑ひのよゝられんほどは、ありかじ』と思ひて、長岡の家に、こもりおたり。そののち、左京のかみの家にも、えいかずなりにけるとかや。

(八) 厚行、死人を家より出す事

むか、右近將監下野の厚行といふものありけり。競馬に、よく乗りけり。帝王よりはじめ奉りて、おぼえ、ことなすぐれたりけり。朱雀院の御時より、村上の御門の御時などは、さかりに、いみじき舍人にて、人もゆるし思ひけり。年たかくなりて、西の京に住みけり。となりなりける人、にはかに死にけるに、此の厚行、どぶらひに行きて、その子にあひて、別れのあひだの事ども、どぶらひけるに、

「此の死にたる親を出さんに、門あゝきかたにむかへり。さればとて、さてあるべきにあらず。門よりこを出すべき事にてあれ」といふを聞きて、厚行がいふやう、あゝき方より出さん事、ことに、おかるべからず。かつは、あまたの御子たちのため、ことに、思はゝかるべし。厚行が、へだての垣を破りて、それより出ゝ奉らん。かつは、生き給ひたりし時、事にふれて、なさけのみありし人なり。かゝるをりだにも、その恩を報じ申さずば、何をもつてか、むくい申さん」といへば、子どもがいふやう、無爲なる人の家より、出さん事、あるべきにあらず。思の方なりとも、我が門よりこを出さめ」といへども、僻事な爲給ひを。たゞ厚行が門より出ゝ奉らん」といひてかへりぬ。

わが子どもにいふやう、となりぬの死にたる、いとほしくけれ

ば、どぶらひに行きたりつるに、あの子どもがいふやう、『思の方なれども、門は一つなれば、これよりこを出さめ』といひつれば、いとほしく思ひて、『中の垣を破りて、わが門より出ゝ給へ』といひつる」といふに、妻子ども聞きて、ふしぎの事、お給ふ親かな。いみじき穀だちのひじりなりとも、かゝる事する、人やはあるべき。身思はぬといひながら、わが家の門より、隣の死人いだす人もある。かへすくも、あるまじき事なり」と、みな、言ひあへり。

厚行、ひが事な言ひあひを。たゞ厚行が、せんやうに、任せて見給へ。物思みくくすく思むやつは、命もみじかく、はかばかき事なり。たゞ、物思まぬは、命も長く、子孫も榮ゆ。いたく物思みくくすきは、人どいはず。恩を思ひ知り、身を忘るゝをこそは、人どはいへ。天道も、これをぞ恵み給ふらん。よくなき事なわひあひを。とて、下人

どもよひて、中の檜垣をたゞこぼちにて、こぼちて、それよりぞ出させける。さて、その事、世にきこえて、殿ばらもあさみほめ給ひけり。さて、そののち、九十ばかりまで、たもちてぞ死にける。それが子どもにいたるまで、みな、いのち長くて、下野氏の子孫は、舍人の中にも多くあるとぞ。

(九)鼻長き僧の事

むかゝ、池の尾に、禪珍内供といふ僧、住みける、真言など、よくならひて、年久しく行ひて、貴かりければ、世の人々、さまざまの祈りをせさせければ、身の徳ゆたかにて、堂も、僧坊も、すこゝも荒れたる所なり。佛供、御燈なども絶えず。をりふゝの僧膳、寺の講演、まげく行はせければ、寺中の僧坊に、ひまなく、僧も住みにきはひけり。湯屋には、湯沸さぬ日なく、浴みのゝりけり。又、そのあたりには、小

家ども、多く出できて、里もにきはひけり。

さて、この内供は、鼻長かりけり。五六寸ばかりなりければ、おどがひより、さかりてぞ見えける。色は、赤むらさきにて、大柑子のはだのやうに、粒だちてふくれたり。かゆがる事、かぎりなし。提げに、湯をかへらかして、折敷を、鼻さゝ入るばかり、ゑりどほして、火のほのほの、顔にあたらぬやうにして、その折敷の穴より、鼻をさゝ出して、提げの湯にさゝ入れて、よくゆて、ひきあげれば、色は、こき紫色なり。それを、そばまに臥し、またに物をあて、人にふますれば、粒だちたる穴ごとけ、けぶりのやうなる物出づ。それを、いたくふめば、白き虫の、穴ごとけ、さゝ出づるを、毛抜きにて、抜けば、四分ばかりなる白き虫を、穴ごとけ取りいだす。そのあとは、穴多くあきて見ゆ。それを、又、同じ湯に入れて、さらめかゝ、初めの如く

ゆづれば、鼻ちひさくおほみあがりて、たゞ人の鼻のやうになりぬ。また二三日になれば、さきの如くにはれて、大きになりぬ。かくのごとく、つゝ腫れたる日かずは、多くありければ、物食ひける時は、弟子の法師に、平なる板の、一尺ばかりなるが、廣さ一寸ばかりなるを、鼻の下にさゝ入れて、むかひわて、かみさまへ、もてあげさせて、物くひはつるまではありけり。こと人して、もてあげさするをりは、あゝく持てあげければ、腹を立て、物も食はず。されば此の法師一人を、定めて、物くふたひごとにもてあげさす。それに心ちあゝく、この法師出でせりけるをりに、朝かゆ食はんとするに、鼻をもてあぐる人なかりければ、いかにせんなど、いふほどに、つかひける童の、われは、よくもてあげまわらせてん。さらば、その御房には、よも劣らむといふを、弟子の法師聞きて、この

童のかくは申すといへば、この童の、中大童子にて、みめもきたなげなくありければ、うへに召しあげてありけるに、この童、鼻もてあげの木をとりて、うるはしくむかひわて、よき程に、高からず、ひきからず、もたげて、粥をすゝらすれば、此の内供、いみじき上手にてありけり。例の法師には、まさりたりとて、粥をすゝるほどに、此の童、鼻をひんとて、そばまに向ひて、鼻をひるほどに、手ふるひて、鼻もたげの木ゆるぎて、鼻はづれて、粥の中へ、ふたりとうち入れつ。内供が顔にも、童の顔にも、粥とぼりて、ひと物かゝりぬ。内供、大いに腹立ちて、頭かほにかゝりたる粥を、紙にてのごひつゝ、おのれは、まがくゝかりける、心もちたる物かな。心なゝのかたぬとは、おのれがやうなるものをいふぞか。我れならぬ、やごとなき人の、御鼻にもこそまねれ。それには、かくやはせんずる。う

たてなりける、心なりのおれものかな。おのれ、たて〜とて、追ひたてければ、たつまゝに、世の人の、かゝる鼻もちたるが、おは〜まさはこそ、鼻もたげにも参らぬ。をこの事、のたまへる御房かな」といひければ、弟子ども、物のうしろに、逃げのきてぞ笑ひける。

(十) 袴垂保昌にあふ事

むかゝ、袴だれとて、いみじき盗人の大將軍ありけり。十月ばかりに、きぬの用ありければ、衣すこ〜まうけんとして、さるべき所々うかゝひありきけるに、夜中ばかりに、人みな、おづまりはてゝのち、月のおぼろなるに、きぬあまた着たりけるぬ〜の、さ〜ぬきのそばはさみて、きぬの狩衣めきたるきて、た〜ひとり、笛ふきて、ゆきもやらず、ぬりゆけば、「あはれ、これこそ、我れに、きぬえさせんとて、出でたる人なめれ」と思ひて、走りかゝりて、きぬを剝がんと思ふ

に、あや〜く、物のおそろ〜くおほえければ、そひて二三町ばかりいけども、「我れに、人こそつきたれ」と思ひたるけ〜きもな〜いよ〜、笛をふきていけば、試みんと思ひて、足をたかく〜て、走りよりたるに、笛を吹きながら、見かへりたるけ〜き、どりかゝるべくも、おほえざりければ、走りのきぬ。

かやうに、あまたたび、とさまかうさまにするに、つゆばかりも、さわきたるけ〜きな〜。『希有の人かな』と思ひて、十餘町ばかり、ぐ〜て行く。『ざりとて、あらんやは』と思ひて、刀をぬきて、走りかゝりたる時に、そのたび、笛をふきやみて、たちかへりて、「こは何ものぞ」と問ふに、心もうせて、我れにもあらで、ついおられぬ。又、「いかなるものぞ」と問へば、今は逃ぐども、よも逃さむ、と、おほえければ、「ひはぎにさぶらふ」といへば、「何ものぞ」と問へば、「あさな袴だれとなんい

はれさぶらふ』と答ふれば、『いふものありときくぞ。あやふげに、希有のやつかな』といひて、『どもにまうてこ』とばかり、いひかけて、また同じやうに、笛ふきてゆく。

この人のけしき、今は、逃ぐども、よも逃さじと、おほえければ、鬼に、神とられたるやうにて、どもに行くほどに、家に行きつきぬ。いづこそ、と思へば、攝津前司保昌といふ人なりけり。家のうちによび入れて、綿あつき衣一つを給はりて、『きぬの用あらん時は、まわりて申せ。心も知らざらん人に、とりかゝりて、汝あやまちすな』と、ありこそ、あさましく、むくつけく、おそろかりか。いみじかりし人のありさまなり』と、捕へられてのち、かたりける。

(十一) なりむら、強力の學士にあふ事

むかひ、なりむらといふ相撲ありけり。時に國々の相撲ども、上り

あつまりて、相撲節まちけるほど、朱雀門に集りて、涼みけるが、そのへん遊びゆくに、大學の東門を過ぎて、南さまにゆかんと、おけるを、大學の衆ども、あまた東の門に出で、涼みたりけるに、此の相撲どもの、すぐるを通さじとて、なりせいせん。なり高しといひて、たちふたがりて、通さかりければ、さすがに、やごとなき所の衆どもの事なれば、やぶりても、え通らぬに、たけひきらかなる衆の、冠うへの衣、こと人よりは、すこしよろしきが、中にすぐれて、いでたちて、いたく制するがありけるを、なり村は見つめてけり。『いさく、かへりなん』とて、もとの朱雀門にかへりぬ。そこにていふ、この大學の衆、にくきやつどもかな。何の心に、われらをば通さじとはするぞ。たゞ通らんと思ひつれども、さもあれ、けふは通らで、あす通らんと思ふなり。たけ低やかにて、中にすぐれて、なりせ

いせん』といひて、通さじと、たちふたがる男、にくきやつなり。あす通らんにも、必ず、けふのやうにせんずらん。何ぬ、その男が、尻鼻血あゆばかり、必ず蹴たまへ』といへば、さいはるゝ相撲、脇をかきて、おのれが蹴てんには、いかにも、生かじものを、教議にてこそいかめ』といひけり。この、尻けよといはるゝ相撲は、おほえある力、こど人よりはすぐれ、走りどくなどありけるを見て、なりむらもいふなりけり。

さて、その日は、おのゝ家々にかへりぬ。またの日になりて、昨日まわらざりゝ相撲なども、あまためゝ集めて、人がちになりて通らんと、かまふるを、大學の衆も、さや心えにけん。昨日よりは人多くなりて、かゝがまゝうゝなりせいせん』といひたてりけるに、此の相撲ども、うちむれて、歩みかゝりたり。きのふ、すぐれて制せゝ大

學の衆、れいの事なれば、すぐれて、大路を中にたちて、過ぐさじと思ふけゝきおたり、なりむら、尻けよといひつる相撲に、目をくはせければ、此の相撲、人より、たけ高く、大きに、若く、勇みたるをのこにて、くゝり高やかにかきあげて、さゝ進み歩みよる。それにつゞきて、ことすまひも、たゞ通りに通らんとするを、かの衆どもゝ、通さじとするほどに、尻けんとする相撲、かくいふ衆に、走りかゝりて、蹴倒さんと、足をいたくも、たげたるを、此の衆は、目をかけて、背を、たわめて、ちがひければ、蹴はづゝて、足の高くあがりて、のけさまになるやうに、おたる足を、大學の衆、とりてけり。そのすまひを、細き杖などを、人のもちたるやうに、ひきさげて、かたへのすまひも、走りかゝりければ、それを見て、かたへのすまひ、逃げけるを追ひかけて、その手に、さげたる相撲をば、投げければ、ふらめきて、二

三丈ばかり投げられて、倒れふくにけり。身くだけて、起きあがるべくもなくなりぬ。

それをば知らずなりむらがある方さまへ、走りかよりければ、なりむらも目をかけて逃げけり。どころもおかず追ひければ、朱雀門の方さまに走りて、脇の門より走り入るを、やがて、つめて走りかよりければ、捕へられぬと思ひて、式部省の築地こえけるを、引きとやめんとて、手をさしやりたりけるに、はやく越えければ、こど所をば、えとらへず、片足すこしさがりたりけるきひすを、沓くはへながら、捕へたりければ、沓のきひすに、足の皮を取り加へて、沓のきひすを、刀にてきりたるやうに、ひききりて取りてけり。なりむら、ついぢのうち立ちて、足を見ければ、血はくりりて、とまるべくもなし。沓の踵、きれて失せにけり。我れを追ひける大學

の衆、あさましく、力あるものにてありけるなめり。尻蹴つる相撲をも、人つゑにつかひて、投げたくめぐり。世の中ひろければ、かゝるものゝあること、おそろしき事なれ。投げられたるすまひは、死に入りたりければ、物にかき入れて、になひて、もてゆきけり。

此のなりむら、かたのすけに、ちかぶの事なん候ひつる。かの大學の衆は、いみじき相撲にさぶらふめり。なりむらと申すとも、あふべき心ち仕らずと、語りければ、かたのすけは、宣旨申し下して、『式部のせうなりとも、その道にたへたらんは』といふ事あれば、まして、大學の衆は、何でふ事かあらんとて、いみじう尋ねもとめられけれども、その人ども、きこえずして止みにけり。

(十二) 鳥羽僧正と國俊と戯れの事

これも、今はむかひ、法輪院大僧正覺猷といふ人おはしけり。その

甥に陸奥前司國俊、僧正のもとへ行きて「参りてこそ候へ」といはせければ、「たゞ今、見参すべし。そなたに、おぼしければせ」とありければ、待ちわたるに、「ときばかりまで、出であはねば、なま腹だ」といおぼえて、出でなんと思ひて、ともに具したる雑色をよひければ、出できたるに、「杵もてこと、いひければ、もてきたるをはきて、出でなん」といふに、この雑色がいふやう、僧正の御房の、「陸奥殿に申したれば、とく乗れ」とあるぞ。其の車おてこととて、「小御門より出でん」と仰せ事候ひつれば、「やうぞ候ふらん」とて、牛飼のせたまつりて候へば、「待たせ給へ」と申せ。時のほどぞあらんずる。やがて歸り來んずるぞとて、早う、たてまつりて出でさせ給ひ候ひつるが、かうて、一時には過ぎ候ひぬらん」といへば、「わ雑色は、ふかくのやつかな。御くるまを、かく召し候ふは」と、我れにいひてこ

そ、かく申さぬ。ふかくなり」といへば、「うちさゝのきたる人にも、おはしまさず。やがて御尻切たてまつりて、きとく、よく申したるぞ」と仰せこと候へば、力および候はざりつる」といひければ、陸奥の前司歸りのぼりて、「いかにせん」と思ひまはすに、僧正は、さだまりたる事にて、湯ぶねに、藁をこまぐと、きりて、一はた入れて、それがうへに、藁をくきて、ありきまはりては、さうなく、湯どのへ行きて、はだかになりて、「えさいかさいどりふすま」といひて、湯ぶねに、さくと、のけさまに、ふす事をぞ給ひける。

陸奥前司よりて、むろをひきあげて見れば、まことに、わらを、こまぐと切り入れたり。それを、湯どのの、たれぬのを、ときおろして、この藁を、みな取り入れて、よく包みて、その湯ぶねに、湯桶を、たにとり入れて、それがうへに、圍碁盤を、うら返しておきて、むろ

ろをひきおほひて、さりげなくて、たれ布に包みたる藁をば、大門のわきに隠し置き、待ちおたるほどに、二時あまりありて、僧正、小門より歸るおどおければ、ちがひて、大門へいで、歸りたる車よびよせて、車の尻に、この包みたる藁を入れて、家へ、早らかにやりて、おりて、このわらを、牛のあちこちありきこうむたるに食はせよとて、牛飼童に取らせつ。

僧正は、例のことなれば、衣ぬくほどもなく、例の湯どのへ入りて、「えさいかさいどりふすま」といひて湯ぶねへ、をどり入りて、のけさまに、ゆくりもなく臥したるに、碁盤の足の、いかりさゝあがりたるに、尻ほねを、暴うつきて、年たかうなりたる人の、死に入りて、さゝそりて、ふたりけるが、そののち、おどなかりければ、近うつかふ僧ふる僧よりて見れば、目をかみに見つけて、死に入りてねたり。こ

はいかにといへど、いらへもせず、よりて、顔に水ふきなどして、どばかりありてぞ、息の志たに、おろくいはれける。このたはぶれ、いとほしたなかりけるにや。

(十三) 繪佛師良秀家のやくるを見て悦ぶ事

これも、今はむかひ、繪佛師良秀といふありけり。家のとなりより火出できて、風おしれほひて、せめければ、逃げ出で、大路へいでにけり。人のかゝする佛も、れはしけり。また、衣、きぬ、妻子なども、さながら、内にありけり。それも知らず、たゞ逃げ出でたるを、ことにて、むかひのつらにたてり。見れば、すでに、わが家にうつりて、けぶり、ほのほくゆりけるまで、大かた、むかひのつらに立ちて、ながめければ、あさましき事とて、人ども、來とぶらひけれど、さわがず。「いかにと、人いひければ、むかひに立ちて、家の焼くるを見て、うち

うなづきて、ときく笑ひけり。

あはれ、おつるせうとくかな。年比は、わろく書きける物かなといふ。時に、どぶらひに來たるものども、こはいかに、かくては立ち給へるぞ。あさましき事かな。ものゝつき給へるか」といひければ、なんでふ、物のつくべきぞ。年ごろ、不動尊の火えんを、あしくかきけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれ、と心えつるなり。これこそせうとくよ。この道を立て、世にあらんには、佛だに、よくかきたてまつらば、百千の家もいで來なん。わたうたちこそ、させる能もおはさねば、物をもをいみ給へ」といひて、あさみ笑ひてこそ立てりけれ。その後、や、良秀が、よぢり不動とて、今に人々めであへり。

(十四) 虎の鰐をとりたる事

これも、今はむかし、つくりの人、あきなひに、新羅シラにわたりける

が、あきなひはて、歸る路に、山の根にそひて、舟に水汲み入れんとて、水の流れ出でたる所に、舟をどめて、水を汲む。そのほど、舟にのりたるもの、舟はたに、おて、うつぶして、海を見れば、山のかげうつりたり。高き岸の、三四十丈ばかり餘りたる上に、虎つゝまりおて、物をうかふ。その影、水にうつりたり。うの時に、人々に告げて、水汲む者を、急ぎ呼ひのせて、手ごとの櫓をおいて、急ぎて、舟をいだす。その時に、虎をどりおりて、舟に乗るに、舟は、とく出づ。虎は、落ちくるほどのありければ、いま一丈ばかりを、えをどりつかで、海におちいりぬ。

舟をこぎて、急ぎて行くまゝに、この虎に、目をかけて見る。おぼしばかりありて、虎、海より出できぬ。泳ぎて、くがさまにのほりて、汀に、ひらなる石のうへに、のほるを見れば、左のまへ足を、膝より、嘴

み食ひきられて、血あゆ鱒に食ひきられたるなりけり、と見るほどに、その切れたる所を、水にひたして、ひらがりを見るを、いかにするにかど、見るほどに、沖の方より、わに、虎のかたをさしてくると、見るほどに、とら、右の前足をもつて、わにの頭に、爪をうちたて、くがさまに、投げ上ぐれば、一丈ばかり、濱に投げ上げられぬ。のけさまになりて、ふためくおどがひのいたを、をどりかよりて食ひて、二たび三たびばかり、うちふりて、なえくどなうて、肩にうちかけて、手をたてたる様なる岩の、五六丈あるを、三つの足をもちて、くだり坂をはいるが如く、のほりてゆけば、舟のうちなる者ども、これがゑわさを見るに、なからは死に入りぬ。舟に飛びかよりたらまゝかばい、みじき劔刀をぬきてあふども、かばかり、力つよくはやからんには、何わさをすべきと、思ふに、肝心うせて、舟こぐ

そらもなくてなん、筑紫には歸りける、とかや。

(十五) 樵夫の歌の事

今はむかゝ、木こりの、山守に、よきをとられて、わび、心う、と思ひて、つら杖うちつきて、をりける。山守見て、さるべきことを申せ、とらせん、といひければ、

あゝきだに、なきはわりなき世の中に、

よきをとられて、われいかにせん。

とよみければ、山もり、返せんと思ひて、こゝくど、うめきけれど、えせざりけり。さて、よきかへとらせてければ、嬉しと思ひけり。とぞ、人はたゞ歌をかまへてよむべと、見えたり。

(十六) 藤六の事

今はむかゝ、藤六といふ歌よみありけり。けすの家に入りて、人も

なかりけるをりを見つけて入りけり。鍋にある物をすくひけるほどに、家あるじの女、水を汲みて、れぼちのかたより来て見れば、かく、すくひ食へば、いかに、かく、人もなき所に入りて、かくはする。物をばまねるぞ。あな、うたてや。藤六にこそいまいけれ。さらば、歌よみ給へ」といひければ、

むかへより、あみだほどけの、ちかひにて、

にゆるものをば、すくふとぞ知る。

とこそ、よみたりけれ。

(十七) 雀、恩を報ずる事

今はむかへ、春つかた、日うらゝかなりけるに、六十ばかりの女ありけるが、虫うちとりて、おたりけるに、庭に、雀の志ありきけるを、童へ、石を取りてうちたれば、あたりて、腰をうち折られにけり。

羽をふためかして、まどふほどに、鳥のかけりありきければ、あな心う。からす取りてん」とて、此の女、急ぎてとりて、息かけなどして、物食はず。小桶に入れて、よるは、をさむ。明くれば、こめくはせ、銅薬にこそげて、食はせなどすれば、子ども孫など、あはれ、女房とては、老いて雀かはる」とて、にくみ笑ふ。
かくて、月比よく養へば、やうくをどりありく。雀の心にも、かくやいなひいけたるを、いみじく、嬉しくと思ひけり。あからさまに、物へいくとても、人に、此のすゝめ見よ。物くはせよなど、いひれきければ、子まごなど、あはれ、なんでふ。雀かはる」とて、にくみ笑へども、さばれ、いとほしければとて、飼ふほどに、飛ぶほどになりけり。今は、よも、鳥に取られむ」とて、外にいで、手にすゑて、飛びやす。見んとて、さ上げたれば、ふらくと、飛ひていぬ。女、多くの

月比日比暮るればをさめ、明くれば物くはせならひて、あはれや、
飛びていぬるよ。また來やする、と見んなど、つれづれに思ひてい
ひければ、人に笑はれけり。

さて、廿日ばかりありて、此の女のわたるかたに、雀の、いたく鳴く
聲、いければ、雀こそ、いたく鳴くなれ。あり、雀の來るにやあらん、
と思ひて、出で、見れば、此のすゝめなり。あはれに、忘れず來たる
こそ、あはれなれ」といふほどに、女の顔をうち見て、口より、つゆは
かりの物を、れと、れくやうにして、飛びていぬ。女、何にかあらん。
雀の、落していぬる物は」とて、よりて見れば、ひさごの種を、たゞ一
つ、落してれきたり。もてきたる、様こそあらめ」とて、とりて、もちた
り。あないみじ。雀の物えて、實にゑたまふ」とて、子ども笑へば、さば
れ、植ゑて見ん」とて、うゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多く生

ひひろごりて、なべてのひさごにも似ず、大きに多くなりたり。女
悦び興じて、さと隣りの人にも食はせ、取れどもく、盡きもせず
多かり。笑ひ、子孫も、これをあけくれ食ひてあり。ひと里、くぼり
などして、はてには、まことにくれて大きなる、七つ八つは、ひさ
ごにせん、と思ひて、内につりつけてれきたり。

さて、月ごろへて、今はよくなりぬらん、とて、見れば、よくなりけ
り。取りれろして、口あけんとするに、すこゝ重く。あや、いけれど、も
きりあけて見れば、物ひとばた入りたり。何にか、あるらん」とて、う
つして見れば、白米の入りたるなり。思ひかけず、あさましく、思ひ
て、大きなる物に、みなを移したるに、同じやうに、入りてあれば、た
ゞ事には、あらざりけり。雀の、ゑたるにこそ、と、あさましく、嬉しく
れば、物に入れて、かく、れきて、残りの瓢どもを見れば、同じやう

に、入りてあり。これを、移しつゝかへば、せんかたなく、多かり。さて、まことに、たのもしき人にぞ、なりにける。となり里の人も、見あさみ、いみじき事に、うらやみけり。

このとなりにありける女の、子ども、いふやう、れなむ事なれど、人はかくこそあれ。はかしくしき事も、えあいで給はぬなど、いはれて、隣りの女、この女房のもとに來りて、さてもく、こは、いかなりし事ぞ。雀のなどは、ほのきけど、よくは、え知らぬは。もどありけんまゝに、の給へといへば、ひさこの種を、一つ落たりし、植ゑたりしより、ある事なりとて、こまかにもいはぬを、なほ、ありのまゝに、細かに、のたまへと、せつに問へば、心せばく、隠すべき事は、と思ひて、かうく、腰折れたる雀のありしを、かひ生たりしを、嬉しと思ひけるにや、瓢のたねを、一つもちてきたりしを、植ゑたれ

ば、かく、なりたるなりといへば、その種、たゞ一つ、たべといへば、それに入りたる、米などは、まわらせん。種はあるべきところもあらず、さらに、えなん散すまじとて、取らせねば、己れも、いかで、腰折れたらん雀、見つけて、かはんと思ひて、目をたてし見れど、腰折れたる雀、さらに見えず。

つとめて、ごどに、うかひ見れば、せどのかたに、米の散りたるを、食ふとて、雀のをどりありくを、石をとりて、もしやとて、打てば、あまたの中に、たびく、打てば、れのづから、打ちあてられて、え飛ばぬあり。悦びて、よりて、腰よく、打ち折りて、のちにとりて、物食はせ、薬くはせなどして、れきたり。一つが徳をだにこそ見れ。まゝして、あまたならば、いかにたのもしからん。あの隣りの女には、まさりて、子どもにほめられんと思ひて、此のうち、米まきて、うかひか

たれば、雀ども集りて、食ひにきたれば、また、うちくくければ、三つ打ち折りぬ。

今は、かばかりにてありなん、と思ひて、腰折れたる雀、三つばかり、桶にとり入れて、銅こそげて、食はせなどして、月比ふるほどに、みなよくなりたれば、喜びて、とに取り出でたれば、ふらくくと飛びて、みな、いぬ、いみじきわざ一つ、と思ふ。雀は、腰うち折られて、かく、月でろ、こめれたるを、よに、ねたし、と思ひけり。さて十日ばかりありて、この雀ども來たれば、悦びて、まづ、口に物やくはへたる、と見るに、ひさごの種を、一つづつ、みな落していぬ。さればよと、嬉しくて、とりて、三ところに植ゑてけり。れいよりも、するくくと、生ひたちて、いみじく大きになりたり。これは、いと多くもならず、七つ八つぞなりたる。女、急みまけて、見て、子どもに「いふやう」はかば

かゝき事、お出でず』といひくかど、我は、隣りの女には、まさりなん』といへば、げに、さもありなん、と思ひたり。

これは、數の少ければ、米多くとらんとて、人にもくはせず、われも食はず。子どもがいふやう』となりの女房は、里どなりの人にも食はせ、われも食ひなどこそせいか。これは、まゝして、三つが種なり。われも、人にも、くはせらるべきなり』といへば、さもと思ひて、近き隣りの人にも、くはせ、われも、子どもにも、諸共に食はせん』とて、おぼらかにて食ふに、にがき事物にも似ず、きはだなどのやうにて、心ちまどふ。食ひと食ひたる人々も、子どもも、われも、物をつきて、まどふほどに、隣りの人どもも、みな、心ちを損じて、來あつまりて、こは、いかなる物を、食はせつるぞ。あな恐ろし。つゆばかり、けふりの、口によりたるものも、物をつき、まどひあひて、死ぬべくこそあれ』

と、腹だちて、いひせためんど、思ひて、きたれば、ぬゝの女をはじめ
て、子どもも、みな、物ればえず、つきちらして、ふせりあひたり。いふ
がひなくて、どもに歸りぬ。二三日も過ぎぬれば、たれくも、心ち
なほりにたり。女、思ふやう、みな、米にならんと、あける物を、急ぎて
食ひたれば、かく、あやかりけるなめりと、思ひて、残りをは、みな、
つりつけて、れきたり。

さて、月ごろ、經て、今は、よくなりぬらんとて、移し入れんれうの、桶
どもぐりて、へやに入り、うれしければ、齒もなき口して、耳のもと
まで、ひとりゑみして、桶をよせて、移しければ、あぶ、蜂、むかで、とか
げ、くちなは、など出で、目鼻ともいはず、ひと身に取りつきて、さ
せども、女、痛さも、れほえず、たゞ、米のこほれかゝるぞ、と思ひて、あ
ばし待ち給へ。雀よ、すこしづと取らんといふ。七つ八つの瓢より、

そこらの毒虫ども出で、子どもをも、さくひ、女をば、さし殺し
てけり。雀の、腰を打ち折られて、ねたしと思ひて、よろづの虫ども
をかたらひて、入れたりけるなり。隣りの雀は、もと、腰折れて、から
すの、命取りぬべかりしを、やいなひいけたれば、嬉しと思ひける
なり。されば、物うらやみは、すまじき事なり。

(十八) 小野篁廣才の事

今はむかひ、小野篁といふ人、れはしけり。嵯峨のみかどの御時に、
内裏に、ふだを建てたりけるに、無惡善と書きたりけり。みかど、篁
に、「よめ」と仰せられたりければ、「よみは讀みさぶらひなん。されど
恐れにて候へば、え申しさぶらはじ」と、奏しければ、「たゞ、申せ」と、た
ひく、仰せられければ、「さがなくて、よからんと申し候ふぞ。さ
れば、君を、のろひまわらせて候ふなり」と、申しければ、「これは、れの

れはなちては、誰かは書かん」と仰せられければ、「さればこそ、申
しさぶらはじ」とは、申して候ひつれ」と申すに、みかど、「さて、なにも、
書きたらん物は、よみてんや」と仰せられければ、「何にても、讀みさ
ぶらひなん」と申しければ、片かなの子もじを、十二かゝせ給ひて、
「よめ」と仰せられければ、「ねこのこの子ねこ、おゝの子のこお」と、
讀みたりければ、みかど、ほゝゑませ給ひて、事なくて、やみにけり。

(十九) 妹背島の事

土佐の國は、たの郡に住む、下種ありけり。おのが國にはあらで、こ
と國に、田を作りけるが、おのが住む國に、苗代をして、植うべきほ
どになりければ、その苗を、舟に入れて、植ゑん人どもに、食はすべ
き物よりは、じめて、なべ、釜、すき、鍬、からすき、などいふ物にいたる
まで、家の具を、舟に取りつみて、十一二ばかりなるを、のこ子、をん

など、二人の子を、舟のまもりめ、にのせれきて、父母は、植ゑんとい
ふもの雇はん、とて、陸に、あからさまに、のほりにけり。舟をば、あか
らさまに、思ひて、すこゝひきすゑて、繫がずして、おきたりけるに、
此のわらべども、舟底に、ぬ入りけり。ほの満ちければ、舟は、浮
きたりけるを、はなつきに、すこゝ吹きいだされたりけるほどに、
干潮に引かれて、はるか、沖に出でけり。沖にては、いと、風吹
きまさりければ、帆をあげたる様にて、ゆく。その時に、童部起きて
見るに、かゝりたる方もなき、沖に出でければ、泣きまどへども、す
べきかたもなし。いづ方とも知らず、たゞ吹かれて、行きにけり。
さるほどに、父母は、人々も雇ひ集めて、舟にのらんとて、きて見る
に、舟なし。おぼしは、風がくれに、さゝかくしたるか、と見るほどに、
呼びさわげども、誰かはいらへん。浦々も、どめられたれども、無かりけ

つけてりハつけ
られにけりトス
ベキナリ

れば、いふがひなくて、やみにけり。かくて、この舟は、はるかの南の
沖にありける島に、吹きつけてけり。童部ども、泣くく、れりて、舟
つなきて見れば、いかにも、人なく、歸るべき方も、れほえねば、島に
れりて、いひけるやう、今は、すべきかたなく、さりどては、いのちを
捨つべきにあらず。このくひ物のあらんかぎりこそ、すこづも
も、食ひて、生きたらめ。これ盡きなほ、いかにて、いのちはあるべ
きぞ。いざ、此の苗の、枯れぬさきに、植ゑん」と、いひければ、げにも、ど
て、水の流れのありける所の、田につくりぬべきを、求め出して、鋤
鍬はありければ、木切りて、庵など、つくりけり。

なり物の木の、をりにななりたる多かりければ、それを取り食ひて、
明く暮すほどに、秋にもなりけり。さるべきにやありけん。つく
りたる田の、よくて、こなたにつくりたるにも、ここの外、まさりた

りければ、多く刈りれきなどして、さりどて、あるべきならねば、め
をどこそ、なりにけれ。をのこ子、女子、あまた生みつけて、また、そ
れが、妻をどこになりくくつ、大いなる島なりければ、田はた
けも、多く作りて、此の比は、その妹背が、生みつけたりける人ど
も、島に餘るばかりになりてぞ、あんなる。妹背島とて、土佐の國の
南の沖にあるとぞ、人かたり。

(二十) 白河院御寢の時、物に魘はれさせ給ふ事

これも、今はむか、白河院御どのごもりて、後物にれうはれさせ
給ひける、ちかるべき武器を、御枕の上にくべきと、さたありて、
義家朝臣に、めされければ、まゆみの、黒ぬりなるを、一張まわらせ
たりけるを、御まくらにたてられてのち、れをはれさせれば、いま
さざりければ、御感ありて、此の弓は、十二年の合戦の時や、持ちた

り」と御たづねありければ、おぼえざるよし申されけり。上皇お
きりに御感ありけるとか。

(廿) 實子にあらざる人、實子のよしおたる事

これも、今はむかし、その人の、一ちやう、子どもきこえぬ人ありけ
り。よの人は、そのよしを知りて、をこがましく思ひけり。そのて
どきこゆる人、うせにけるのち、その人のもとに、年比ありける侍
の、妻にぐして、田舎へいにけり。そのめ、うせにければ、すべきやう
もなく、京へのほりにけり。よろづあるべきやうもなく、たより
なかりけるに、此の子といふ人こそ、一定のよしいひて、親の家に
おたなれ、と聞きて、此の侍、参りたりけり。故殿に、年比さぶらひ
なにがしと申す者こそ、参りて候へ。御げんさんに、いりたかり候
ふ」といへば、此の子、さる事ありとおぼゆ。おぼしきぶらへ。御對面

あらんずるぞ」といひ出たりければ、侍、おれほせつと思ひて、ね
ぶりおたるほどに、近うめいつかふ侍出で来て、御出居へ、まわら
せ給へ」といひければ、悦びて、まわりにけり。このめいつぎいつる
侍、おぼし候はせ給へ」といひて、あなたへ行きぬ。

見まはせば、御でわのさま、故殿のれはしまし候ふおつらひに、つ
ゆかはらず、みさうじなどは、少し古ひたるほどにや、と見るほど
に、中のさうじ、引きあくれば、きと見上げたるに、此の子と名のる
人、あゆみ出たり。これを見るまゝに、此の年比の侍、さくりもよ
しと泣く。袖もおぼりあへぬ程なり。このあるじ、いかに、かくは泣
くらんと思ひて、ついでに、こは、など、かく泣くぞ」と問ひければ、故
殿のれはしましに、たがはせれはしまさぬが、あはれにおぼえ
て、といふ。さればこそ、われも、故殿には、たがはぬ様に覺ゆるを、こ

の人々の、あらぬなどいふなる、あさましき事と思ひて、この泣く侍にいふやう、れのれこそ、ことの外に老いにけれ。世の中は、いかやうにて過ぐるぞ。われはまた、をさなくて、母のもとにこそありしかば、故殿のありやう、よくもれほえぬなり。れのれをこそ、故殿と、たのみてあるべかりけれ。何事も申せ、また、ひとへにたのみてあらんずるぞ。まづ當時さむげなり。このきぬ着よとて、綿ふくよかなるきぬ、一つぬぎてたひて、今はさうな。これへまわるべきなり」といふ。この侍、をれほせておたり。

きのふけふの者の、かくいはんだにあり。いはんや、故殿の、年ごろのもの、かくいへば、家ぬゝをみて、此のをとこの、年ごろ、すぢなくてありけん、ふびんの事なり」とて、後見にめいいで、これは、故殿の、いとほしく、を給ひゝものなり。まづ、かく、京にたひたちたる

に、思ひはからひて、さたゝやれといへば、ひけひくけ敷なる聲にて、むといらへてたちぬ。この侍は、そらごどせむといふをぞ、佛に申し切りてける。

さて、このあるを、我を不定げにいふなる人々、よひて、この侍に、事の子細いはせてきかせん、とて、うゝろ見めゝ出で、あさて、これへ、人々わたらん、といはるゝに、さるやうに、ひきつくろひて、もてなし、すさまじからぬやうにせよ、といひければ、むと申して、さまゝに、さたゝまうけたり。このどくいの人々、四五人ばかり、きあつまりにけり。あるを、常よりも、ひきつくろひて、出で合ひて、御酒たひゝ参りて、のちいふやう、わが親のもとに、年比れひたちたるもの候ふをや、御覽すべからん、といへば、この集りたる人々、心ちよげに、顔さき赤めあひて、もとも、めいいださるべく候ふ。故殿

に候ひけるも、かつはあはれに候ふといへば、人やある。なにが
まわれといへば、ひとり立ちて召すなり。
見れば、鬢はげたるをのこの、六十ばかりなるが、まみのほどなど、
そらごどすべうもなきが、うちたる白き狩衣に、ねり色のきぬの、
さるほどなる着たり。これは、給はりたる衣とれほゆ。めい出され
て、ことうるはしく、扇を笏にとりて、うずくまりわたり。家主のい
ふやう、や、や、このてよのそのかみより、れのれは、生ひたたる
ものぞか。などいへば、むといふ。見えにたるが、いかんといへば、
此の侍、いふやう、その事に候ふ。故殿には、十三より参りて候ふ。五
十まで、よる晝はなれまわらせ候はず。故殿の「小冠者、く」と、召し
候ひき。無下に候ひし時も、御あどに、ふせさせはしまして、夜中、
あかつき、大つぼ、まわらせなど、を候ひし。その時は、わひしう、堪へ

がたくれほえ候ひしが、たくれ参らせて後は、など、されほえ候ひ
けん、と、悔しうさぶらふなりといふ。

あるものいふやう、そもく、ひと日、汝を呼び入れたりしをり、我
が障子をひきあけて、出でたりしをり、うち見あげて、ほろくくと
泣きしは、いかなりし事ぞといふ。その時、侍がいふやう、それも、べ
ちの事に候はず。田舎にさぶらひて、故殿うせ給ひにき、と、うけた
まはりて、今一度まわりて、御ありさまをだにも、拜み候はん、と思
ひて、れそれく、参り候ひし、さうなく御で、おめい出させれば
しまして候ひし、大かた、かたじけなく候ひしに、御をやうじを、ひ
き明けさせ給ひ候ひしを、きと見あげ参らせて候ひしに、御をほ
うしのまくろにて、まづ、さういでさせれば、しまして候ひしが、故
殿の、かくのごとく出でさせれば、しましたりしも、御烏帽子は、ま

くろに、見えさせれば、しまゝが、思ひいでられれば、しまゝて、たほえず、涙のこぼれ候ひなり」といふに、この集りたる人々も、意みきふくみたり。また、このあるにも、氣色かはりて、さて、また、いづくか、故殿には似たる」といひければ、この侍、その外は、大かた、似させれば、しまゝたる所、れば、しまゝさず」といひければ、人々ほゝ意みて、ひとりふたりつゝこそ、逃げうせにけれ。

(廿二) 或僧、人の許にて、氷魚ぬすみくひたる事

これも、今はむかゝある僧、人のもとへいきけり。酒などすゝめけるに、氷魚は、むめていできたりければ、あると、めづらく思ひて、もてなくけり。あると、よりの事ありて、うちへ入りて、またいでたりけるに、この氷魚の、この外に、すくなくなりたりければ、あると、いかにと思へども、いふべきやうも、なかりければ、物がたりい

おたりけるほどに、この僧の鼻より、氷魚の一つ、ふと、いでたりければ、あると、あやうければ、えて、その鼻より、ひをの出でたるは、いかなることにか」といひければ、とりもあへず、此の比の氷魚は、目はなより、ふり候ふなるぞ」といひたりければ、人みな、は」と笑ひたり。

(廿三) 帽子叟、孔子と問答の事

今はむかゝ、もろこゝに、孔子は、やゝの中の、岡だちたるやうなる所にて、逍遙したまふ。われは、琴をひき、弟子どもは、ふみをよむ。こゝに、船にのりたる叟の、帽子したるが、船を蘆につなきて、くがにのほり、杖をつきて、琴のあらべの終るをきく。人々、あやゝきものかな、と思へり。このれきな、孔子の弟子どもをまねくに、ひとりの弟子、まねかれてよりぬ。叟云はく、この、琴ひき給ふは、たれぞ。もゝ

國の王か」と問ふ。さもあらず」といふ。さは、國の大臣か。それにもあらず。さは、國のつかさか。それにもあらず。さは、なにぞ」と問ふに、たゞ、國のかゝこき人として、政を、あゝき事をなほし給ふ、かゝこ人なり」とこたふ。たきな、あさわらひて、いみじきたれものかな」といひて、去りぬ。

御でし、ふしぎに思ひて、聞きまゝにかたる。孔子聞きて、かゝこき人にこそあなれ。とくよび奉れ」といふ。御弟子は、りりて、今、船漕き出づるをよびかへす。よばれて、出で來たり。孔子のたまはく、何わざと給ふ人ぞ。たきなのいはく、させるものにも侍らず。たゞ、船にのりて、心をゆかささんがために、まかりありくなり。君は、また何人ぞ。世の政をなほさんため、まかりありく人なり。叟のいはく、きはまりて、はかなき人にこそ。世にかけをいとふものあり。晴

れに出でし、はなれんとはゝる時、影はなるゝ事なく。陰にゐて、心のどかにをらば、影はなれぬべきに、さはせずして、はれに出でし、はなれんとする時には、力こそつくれ、影はなるゝ事なく。また犬のたかほねの、水に流れてくだる、これをとらんと、はゝるものは、水にたほれてたぬ。かくのごとく、むやくの事を、せらるゝなり。たゞ、たかるべき居所ゝめて、一生をおくられん、これ今生ののぞみなり。この事をせずして、心を世にそめて、さわがるゝ事は、きはめて、はかなき事なり」といひて、返答もきかて、かへりゆき、船にのりて、漕ぎ出でぬ。孔子、そのうしろを見て、二度をがみて、さの音せぬまで、拜み入りて、お給へり。音せずなりてなん、車にのりて、歸り給ひにけるよし、人のかたりゝなり。

廿四 五色の鹿の事

これもむかひ天ぢくに、身の色は五色にて、角の色は白き鹿、一つありけり。深山にのみすみて、人に知られず。その山のほとりに、大なる川あり。その山に、また鳥あり。此のかせぎを友として過す。ある時、この川に、男一人流れて、すでに死なんとす。われを、人たすけよと、さげぶに、このかせぎ、このさげぶ聲をきよて、悲しみにたへずして、河をれよぎよりて、この男をたすけてけり。男、命のいきぬる事をよろこびて、手をすりて、鹿にむかひていはく、何事をもちてか、此の恩を報い奉るべきといふ。かせぎのいはく、何事をもちてか、恩をば報いん。たゞ、この山に、我ありといふことを、ゆめく人に語るべからず。わが身の色五色なり。人知りなば、皮を取らんとて、必ず殺されなん。この事を恐るゝによりて、かゝるみ山に隠れて、あへて人に知られず。なかるを、汝がさげぶ聲を悲しみて、身

の行くへを忘れて、助けつるなりといふ時に、男、これ誠に、ことわりなり。さらに、もらす事あるまじと、返すく、契りて去りぬ。

もとの里に歸りて、月日をれくれども、さらに、人にかたらず。かゝるほどに、國の後、夢に見給ふやう、大なるかせぎあり。身の色は五しきにて、角をろく。夢さめて、大王に申し給はく、かゝる夢をなん見つる。このかせぎ、さだめて世にあるらん。大王、必ず尋ねとりて、われに與へたまへと、申し給ふに、大王、宣旨を下して、もゝ五色のかせぎ、尋ねて奉らんものには、金銀珠玉等のたから、ならびに、一國等をたふべと、仰せふれらるゝに、この助けられたる男、内裏に参りて、申すやう、尋ねらるゝ色のかせぎは、その國の、深山にさぶらふ。あり所を知れり。狩人を給はりて、取りて参らすべと、申すに、大王、大いによろこひ給ひて、みづから、多くの狩人をぐして、

この男を、あるべにめいぐして、行幸なりぬ。
 その深山に入り給ふ。このかせぎ、あへて知らず、ほらのうちに入
 せり。かの友とするからず、これを見て、大いにれどろきて、聲をあ
 げて泣き、耳をくひて引くに、鹿おどろきぬ。からず告げていばく、
 「國の大王、多くの狩人をぐして、この山をとりまきて、すでに殺さ
 んどお給ふ。今は逃ぐべきかたなく、いかゞすべきといひて、なく
 く去りぬ。かせぎ驚きて、大王の御こゝのもとへ、歩みよるに、狩
 人ども、矢をはげて射んとす。大王のたまふやう、かせぎ、恐るゝ事
 なくしてきたれり。さだめて、やうあるらん。射る事なかれ。その時、
 狩人ども、矢をはづして見るに、御こゝのまへに、ひさまづきて申
 さく、「われ、毛の色を恐るゝによりて、この山に、深く隠れすめり。お
 かるに、大王、いかにして、わが住所をば知り給へるぞや」と申すに、

大王のたまふ、この興のそばにある、顔にあざのある男、告げ申し
 たるによりて、來れるなり。かせぎ、見るに、顔にあざありて、御興の
 かたはらにわたり、わが助けたりし男なり。
 かせぎ、かれに向ひていふやう、命を助けたりし時、この恩、何にて
 も、報じつくしがたきよし、いひかば、こゝに、我れあるよし、人に
 かたるべからざるよし、返すく、契りしところなり。おかるに、今
 その恩を忘れて、殺させ奉らんとす。いかに、汝、水にれほれて、死な
 んどせし時、わが、いのちをかへりみず、泳ぎよりて、助けし時、なん
 ぢ、かぎりなく、喜びし事は、覺えずや」と、深くうらみたるけしきに
 て、涙を垂れて泣く。そのときに、大王、れなむく涙を流して、のたま
 はく、「汝は、ちく生なれども、おひをもて、人をたすく。かの男は、よく
 にふけりて、恩を忘れたり。ちく生といふべし。恩を知るをもて、人

倫とす」とて、このをどこをどらへて、鹿の見る前にて、くびを斬らせらる。又、のたまはく、今よりのち、國の中に、かせぎを狩ることなかれ。もし、此のせんじを背きて、鹿の一頭にても、殺すものあらば、すみやかに、死罪にれこなはるべ」とて、歸り給ひぬ。そののちより、天下安全に、國土ゆたかなりけるとぞ。

(廿五) 檢非違使忠明の事

これも、今はむかく、たゞあきらまいふ檢非違使ありけり。それが若かりける時、清水の橋のもとにて、京童部どもといさかひをえけり。京わらべ、手ごとの、刀をぬきて、忠明をたちこめて、殺さんとえければ、忠明も、太刀を抜き、御堂さまにのほるに、御堂の東のつまにも、あまた立ちて、むかひあひたれば、内へ逃げて、とどみのもとを、脇にはさみて、前の谷へ、をどり落つ。とどみ、風にあぶかれ

て、谷のそこに、鳥のゐるやうに、やをら落ちにければ、それより、逃げていにけり。京わらべども、谷を見れろして、あさましがり、たちなみて、見けれども、すべきやうもなく、やみにけりとなん。

(廿六) 小野宮大饗の事

附 西宮殿富小路大臣等大饗の事

今はむかく、小野宮殿の大饗に、九條殿の御贈り物に、と給ひたりける女の装束に、そへられたりける、紅のうちたる細長を、心なかりける御まへの、取りはづして、やり水に、落し入れたりけるを、すなはちどりあげて、うちふるひければ、水ははよりて、乾きにけり。そのぬれたりけるかたの袖の、つゆ水にぬれたるも見えて、同じやうに、うち目などもありける。昔は、うちたる物は、かやうになんありける。

また、西宮殿の大饗に、小野宮殿を尊者にればせよとありければ、
 「年老い、腰いたくて、庭の拜（まゐり）えすまじければ、えまうづまじきを、雨
 ふらば、庭の拜もあるまじければ、まわりなん。ふらずば、えなんま
 なるまじき」と御返事のありければ、雨ふるべきよし、いみじく祈
 り給ひけり。そのあるにや、ありけん。その日になりて、わざとは
 なくて、空くもりわたりて、雨をよさければ、小野宮殿は、わきより
 のほりて、れはしけり。中島に、大きに木だかき松、一本たてりけり。
 その松を見と見る人、藤のかよりたらましかば、どのみ、見つゝい
 ひければ、この大饗の日は、む月の事なれども、藤の花、いみじくを
 かしくつくりて、松の梢より、ひまなうかけられたるが、時ならぬ
 ものは、すさまじきに、これは、空のくもりて、雨のをほふるに、いみ
 じく、めでたう、をかいう見ゆ。池のれもてに、影のうつりて、風の吹

けば、水のうへも、一つになひきたる、まことに、藤波といふとは、こ
 れをいふにやあらん、とぞ見えける。

また、後の日、富小路のおどの大饗に、御家のあやしくて、どころ
 ぶのちつらひも、わりなくかまへてありければ、人々も、見ぐる
 べき大饗かな、と思ひたりけるに、日くれて、事やうくはてがた
 になるに、引出物の時になりて、東の廊の前に、ひきたる幕のうち
 に、引出物の馬を、引き立てゝありけるが、幕のうちながら、いなゝ
 きたりける聲、そらをひかかひけるを、人々、いみじき馬の聲かな、
 と聞きけるほどに、まく柱を蹴折りて、くちどりをひきさげて、出
 でくるを見れば、黒くり毛なる馬の、たけ八つきあまりばかりな
 る、ひらに見ゆるまで、身ふとく肥えたる、かいてみがみなれば、額
 の、もち月のやうにて、白く見えければ、見て、ほめのよりりける聲、

かゝがまゝきまでなん、きこえける馬のふるまひ、おもだち、尻さし、足つきなどの、こゝはと見ゆる所なく、つきづくゝかりければ、家のまつらひの、見ぐるゝかりつるも消えて、めでたうなんありける。さて、世のすゑまでも、かたり傳ふるなりけり。

宇治拾遺物語抄 上卷 終

明治二十八年十一月廿五日印刷
 明治二十八年十一月三十日發行

版權
 所有

編纂者

東宮鐵眞呂

東京市淺草區
 小島町五十七番地

發行者

江島金太郎

東京市淺草區
 諏訪町六番地

印刷者

熊田宜遜

東京市神田區
 三丁目二十五番地

發行所

萬笈閣

東京市淺草區諏訪町六番地

椀屋書店

Holland